



2011年(平成23年)
10月号(No. 797)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

2011年、2012年、 新執行部理事の横顔と抱負

今年6月の通常総会で、尾上会長のもとで執行部の新しい体制が固まった。そこで新執行部の理事に、これまでの略歴、山岳会入会の動機、今後どういふ活動をしていきたいのかなど、抱負を語ってもらった。少しでも、理事を身近に感じてもらえたらと思う。

公益社団法人への道筋をつける

吉永英明(副会長)

学生時代は山岳部に所属。1965年、千葉大学を卒業して以来、本会に関係なく過ごしていたが、70年、大学のヒマラヤ遠征計画の推薦を得るため入会した。山岳部監督をしていた関係で、95年、呼び出しがあり、財務担当理事に就任。爾来16年、理事、評議員、PTメンバーを務めさせていだいた。

現在、「公益社団」への「新法人移行」業務と「森づくり事業」の本会における位置づけを主に担当している。本年10月の公益認定申請に向けた事務作業を鋭意進めている。来年度から「公益社団法人」に移行できれば、任期の残り1年で、公益目的事業比率の維持および会員減傾向が予想されることに伴う経費節減に道筋をつけたと考えている。

目次

2011年、2012年、新執行部理事の横顔と抱負	1
「秘境ジャーナリスト」ワルテル・ボナッチィ逝く	4
定款変更についての自然保護委員会の見解	6
神大キャンパスに巨大ウォールがオープン	7
東西南北	8
初期会員・佐藤武雄氏の書簡を調べてナンガ・パルパットの切手	
深田久弥没後40年 芦安山岳館で企画展	
活動報告	10
山の自然学研究会	
支部だより	11
秋田支部	
図書紹介	12
英文ジャーナル2011年第12号発行	14
会務報告	15
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
図書受入報告	17
INFORMATION	18
大学山岳部の復活奮闘記④	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

文化的活動の一層の強化を

西村政晃(副会長)

中学3年の時、日本山岳会隊がマナスルに初登頂、その記録映画『マナスルに立つ』を村の映画館で見えて感動、大きくなったら登山をやろうと決心した。1960年、千葉大学へ入学。山岳部に入部し、当時活発だった大学山岳部で6年間、勉強はほどほどにして登山に熱中した。72年11月、前述した映画の印象が強烈で、JACCは「高嶺の花」と思っていたが、大学の先輩から多彩な活動、素晴らしい会員で運営されているクラブだから入った方がよいと強く勧められ、入会した。

このところ若い理事を中心に進められているJAC-YOUTHの活動によって入会者の確保

会員の若返りなどに効果が表われている。この活動の推進とあわせて、日本山岳会らしい高所登山をはじめとしたパイオニアワーク、機関誌、自然保護等々の「文化的活動」を一層強化、充実を図ることで、少しずつながらも会の活性化が図れれば、と思う。

海外登山から幅広い活動を

高原三平(常務理事)

大学山岳部で山にのめり込み、冬山で赤谷尾根より剣岳、春山に利尻岳南稜と若さで立ち向かう。社会に出てもヒマラヤ登山に憧れ、山を中心とした生活が続く。2回のヒマラヤ遠征は出身校の芝浦工大の隊で実現する。

JACCへの入会は、ヒマラヤ登山の許可申請の手続き上、会員で

あることが必要と判断したことが大きい。ただし、当会での活動は、それから15年後のことだった。総務、会報の委員会活動で、会について学ぶ。その後、総務担当理事、評議員を2期ずつ務めた。

これからの当会のあり方は、海外の高峰登山だけでなく、山好きな人の環境保全活動への参加の受け皿づくり、高齢者および若年者への登山の普及等であろう。山のエキスパートだけでなく普通の人が活動できる場づくりが必要だ。

会員に求心力ある活動を

森 武昭 (常務理事)

山岳関係者と縁ができたのは、1984年に北アルプスの穂高岳山荘に太陽光発電システムを設置し、その効果を実証した時に遡る。その翌年、科学委員会からのお誘いで日本山岳会に入会した。

その後も山小屋での自然エネルギーの実用化に努め、その業績で95年、秩父宮記念学術賞を受賞した。これが弾みになって、申請までに5年を要したが、00年から上高地山岳研究所にミニ水力発電を設置・公開している。この間、日本山岳会では、理事・評議員を

務めてきたが、一番印象に残っているのは、100周年記念として実施した「中央分水嶺踏査」で、本部の事務局長を務めたことである。苦勞も多かったが、会員の全面的な支援があつて完遂できた事業である。これからの日本山岳会も、多くの会員がまとまって取り組めるような求心力の働くイベントができないかと思っている。

若い会員の取り込みが急務

小林義亮 (常務理事)

50歳直近の1988年5月、西吾妻若葉山行の時、勧められて入会。アルパインスキークラブが活動の中心になっている。公益法人制度改革の検討が進んだ途上で、新法人移行検討委員会の委員となり、これが会のことを真剣に考える契機となった。

担当は財務。会員の減少、老齡化がここ数年の財務を圧迫しており、大は財政健全化、小は公益法人認定後の体制整備など難問が山積している。老齡化には、従来の枠にとらわれない発想で若い会員を取り込むことが局面打開の手段になると考えられる。円滑な会運営には各自の意識、行動などが必

須であろう。与えられた職務に全力投球する所存である。

山岳会自前の人材育成を

野沢誠司

1983年、早大山岳部卒業。97年までコーチ、00年まで監督。01年より指導委員、09年よりJAC-YOUTH担当理事となる。

入会時の動機はハッキリ覚えていないが、毎年のように山岳会本体や青年部の海外登山があり、手伝っているうちに自然入会。

若年会員が少ないのは、会に未来がないことになる。大学山岳部が衰退した現在では、会として人材育成を自前でやらざるを得ない。老齡で入会した会員は自己の楽しみのみを追及することに忙しいだろうが、少子高齡化対策と同様、会費の一部は中堅・若手の助成に使っていくべきだと思う。今後とも青年部や学生部の活動にご理解ご協力をお願いしたい。

リーダーになれる登山者育成を

中山茂樹

小さいころから京都の稲荷山や愛宕山には行ったことがあったが、中学校の夏休みに常念岳と

槍ヶ岳に登って以来山好きになった。その後、京都大学山岳部に入り、ブータン、中国の山に挑戦する機会も得た。特に海外登山では、本当に多くの方々の理解と支援の上に計画が実現し得るものであることを実体験し、今度は何かのお役に立てればと思い、東京転勤を機に日本山岳会に入会した。

最近、また若い人たちが大勢山へ来るようになった。基礎を身につけて、リーダーになれる登山者になつてもらえるように本会で支援すべく取り組んでいる。

多様で魅力ある会へ

永田弘太郎

大学山岳部にも社会人山岳会にも属したことはない。一人もしくは友人と、漫然と山登りをしてきたが、仕事で、登山用のバス時刻表を作ったことがきっかけで入会。入会するまで、登山界のことにもまったく関心がなかった。

入会は1996年。入会と同時に総務委員会に入り、同期会に入会。すぐに「大食上戸餅食らい、せっかち、大雑把」の同じ指向をもった会員がいることに気づき、のびのびと活動。仲間といること

や山に登ることが楽しくなった。いつからかこの楽しさを持続させたいと思うようになり、知らない人たち、とくに若い人たちに伝えたいと思うようになった。それにはより多様でより魅力ある会にし、広く人に知らせるべきだと思う。

「山好きが増えれば日本は良くなる」

萩原浩司

山好きの父親に連れられ、小学生のころから日光や那須の山に親しむ。高校、大学時代は山岳部に所属。1982年、青山学院大学卒業後は山と溪谷社に入社し、『山と溪谷』編集長などを経て、現在は山岳・自然図書出版部。

山岳会には99年、大学山岳部監督会議をきっかけに入会。山の魅力をひとりでも多くの人に伝え、山岳遭難を1件でも減らしたいとの思いから、日本を代表する山岳組織の一員となった。「山が好き」な人が増えれば日本は良くなる」との思いを胸に、JAC-YOUTHや「山の日」制定プロジェクトで力を発揮したいと考えている。

世代交代を図り、若い人たちに輝きを
節田重節

1943年、新潟県佐渡出身。65年、明治大学法学部を卒業、在学中は山岳部に所属。翌年、山と溪谷社に入社、『山と溪谷』編集長などを歴任し、06年退社。

日本山岳会へは、70年のエベレスト登山隊の準備を手伝ったのを機に入会。

山岳会に限らず、日本の登山界全体の高齢化が進み、かつてのような活気が失われている。自分も含めて、速やかに世代交代を図り、若者たちに輝きを取り戻させてあげたいと願っている。運営面も大切だが、元氣のある山岳会にするには、それなりの「仕掛け」が必要であろう。尾上会長とは大学は異なるが、学生部以来の付き合いでもあり、精一杯サポートしていきたいと考えている。

広く登山者に有益な情報を

志賀尚子

日本医大付属病院救命救急センターに就職後4年目に、日本山岳会90周年記念事業の「1995マカルー登山隊」に医師として参加するとともに日本山岳会に入会。それ以前は、ほとんど山との関わりはなかったが、以後、日本

山岳会医療委員会に参加したり、日本山岳会とは直接関係ないが、第48次南極地域観測隊隊員として南極で越冬したり、アンナプルナI峰、エベレスト、クーラカンリ登山隊にも同行するなど、山や極地との縁が続いている。

山岳会会員をはじめとして広く登山者に、有益な情報、サービスマをたらし、魅力ある活動を続けていくことを希望、その一助となるよう尽力したいと考えている。

期待される山岳会の社会的役割

古野淳

1995年の海外登山で、日本山岳会にお世話になったことがきっかけで入会。

現在、JAC-YOUTHをはじめとする若手クライマーの育成にかかわっている。彼らの旺盛な登攀意欲に引きずられて山行に同行しているような雰囲気だ。歴史ある社会人山岳会も高齢化が進み、系統だった指導が困難な状況で山岳会の果たす責任は大きいと思う。海外登山基金や雪山天気予報も公益性が高い。さらに山研委員会の協力で、今冬からアマチュア無線機と気象観測ロボットの設

置を小屋閉めまでに完成させ、登山者から発信されたGPSデータや音声を手研で受信してインターネットに接続できるようにする。リアルタイムで気象情報を閲覧することが可能になり、遭難対策にも利用できるだろう。

今年度は学生部の担当理事として、来年度は海外登山を推進中。未来の山岳会を背負うようなクライマーに育つことを期待する。

多様化した登山に柔軟に対応

川瀬恵一

学生時代は山と競技スキー、その後クライミングと、山はオールラウンドに楽しむことが主義。トレイルランで駆け抜けることもあれば、自然の変化を観察しながらの登山も実践。

日本山岳会には、我が国を代表する伝統と実績を直接感じ、知ることによって、山への関わりに広がりを作りたいと思い入会した。海外委員会では、昨年度の海外登山隊クロニクルの企画、開催を担当。今後多様化した登山に柔軟に対応しつつ、さまざまな形で登山を楽しむ会員の活動の場を提供・発展させるべく努力したい。

ピープル 「秘境ジャーナリスト」ワルテル・ボナッティ 逝く

江本嘉伸

9月13日、ワルテル・ボナッティが逝った。81歳だった。

1930年、イタリアのベルガモ生まれのボナッティは、19歳でピッツ・バディレ北東壁の第3登、グランド・ジョラス北壁カシン・ルート第3登などの先鋭的な登攀をなしとげ、一躍ヨーロッパの登山界の注目を集めた。以後、アルプス、ヒマラヤで活躍したが、妥協をしない先鋭的なボナッティには、周囲からの嫉妬と非難がついてまわった。数々の輝かしい登攀記録を残し、わずか35歳でクライミングの世界から退いた。

ボナッティは1998年9月から10月にかけて日本山岳会の招きで来日した。当時68歳。スケジュール表によると、9月18日朝、夫人とともに成田着。六本木の国際文化会館に宿泊し、そこでの歓迎会に出席した後、青森、大阪、京都と各地の山岳人と交流、大阪では講演会を開き、東京に戻った。私は富士山五合目、山麓の忍野

一泊の旅に同行させてもらい、10月2日、長めのインタビューをした。内容は『山岳 Vo.194 1999』の巻頭に『ワルテル・ボナッティに聞く「たての冒険」から「横の冒険」へ』として記録されている。

35歳はある意味、人生のピークが始まるうという時期だ。超一流のクライマーだったあのボナッティが登山の世界を退いて、どのような日々を生きたかを率直に聞いた。彼は、まず自身の資質として、「好奇心の強さ」をあげた。その資質が当初は自分を山に向かわせたが、自分の基準としてのアルピニズムができなくなると、「横の冒険」に転じた、そしてジャーナリストの道を選んだ、と。「自分自身であり続けることを大事と思っている。別に山でなくてもいい。人間としての経験を積み重ね、境界線押し広げることが私には重要でした。それは、人間として成長し続けるということ」



今年4月、ピオレドール授賞式のボナッティ

「秘境ジャーナリスト」という分野があるとすれば、ボナッティはそういう世界を選び、人々を文章と写真で「ガイド」することに新たな自分の場を見いだした。現役クライマー当時からボナッティを書き手に登用していた『エポカ』という雑誌が、山をやめたボナッティを地球各地の、秘境とされる地域にライター兼カメラマンとして派遣する企画を立ててくれた。ユーコン川の単独川下り、アマゾン流域のヤノマミ族の集落探訪、イースター島行などなどアフリカ、南米大陸、極東、世界各地の野生を求めてボナッティは旅をし、写真とともに『エポカ』に掲載した。1回16頁から22頁のシリーズで、80回にも及んだという。

ボナッティが「最初の横の冒険」ととらえている「寒極」での

体験は、興味深かった。マイナス76度Cを記録し、地球の「寒極」といわれたシベリアのオイミヤコン。タイガの森に住むトナカイ遊牧民との暮らしである。

「まず水がない。川は凍りついてしまふからね。それで川の氷が少ないうちに切り取って外に積み重ねておく。農家で薪を外に置いておくと同じだよ」

30*離れた場所で放牧しているトナカイの群れの世話をしに、遊牧民たちは15日から20日交代で出かける。そういう場合、テントを中心に3カ所にたき火を作って熱くなった空気が壁のようになって寒気を遮断する。

「風がないのでこの中は十分暖かくなるのさ。1962年から63年にかけての冬、フルシチョフの時代だった」え？ フルシチョフの時代にそんな場所に行けた？ 一応ロシア語専攻のジャーナリストのはしり私の私は驚いた。

「おもしろい話があるんだ。『エポカ』はどちらかというと右寄りの雑誌だった。でも『ノーボスチ』といい関係を持っていた。そして『ノーボスチ』の編集長がフルシチョフの友人だった。おかげでイ

タリアの共産主義者でさえ行けなかつた場所に行けたんだ」

アラスカやカナダ、アフリカでの野生動物たちとの関わりもおもしろい話だった。ユーコン川2500^キをひとりりでカヌーで下った時、はじめは銃を持って野生との遭遇に備えたが、そのうち銃を忘れてることに気づいた。

「川岸で眠ってしまった朝、周りはグリズリーの足跡だらけだったことがある。自分が自然と同化していったんだ。そういう自分を動物たちもわかるのだろう」

クライマーとしてのボナッティよりは、このシリーズでボナッティを知ったイタリア人も少なくなかつたようだ。往年の美人女優ロッサナ・ボデスタも『エボカ』の記事を通じて彼の熱心なファンになった。ある日、女性誌のインタビューで「遭難して離れ小島に一生暮らさなければならぬ」と聞いたら誰と一緒にいたいのか?と聞かれ、即座に「ボナッティ」と答えた。2人はそれがきっかけで結婚、日本滞在中もおしどりぶりは際立っていた。

かつて作家、深田久弥の『ヒマラヤの高峰』は、ヒマラヤに憧れ

る人の必読書だった。その「ケール・トゥー」の項に執念の初登頂を達成することになる1954年のイタリア隊のアタックの様子が書かれている。「第9(キャンプ)の2人はその夜はほとんど眠れなかつた。後続の者が食糧と酸素補給器を持ってくるはずなのに、それが到着しないのである」

「第9の2人」とは後に初登頂者として明らかにされるアタック隊の2人、アキツレ・コンパニョーニとリーノ・ラチエデッリのことであり、そして深田は書いていないが、「後続の者」とは、当時24歳若きボナッティとフンザ人ポーターのことだ。アタッカーの2人は、元氣いっぱいボナッティが出しぬくのではないかと心配したらしい。わざとテント場を教えず、ボナッティたちはアタッカー用の酸素をデポした後、8000^キの高所でビバークを強いられた。

単独行動しがちなボナッティはイタリア山岳会からも批判された。本人は勿論異を唱え、この問題は半世紀におよぶ議論を呼び、最終的にボナッティが正しかったことが登頂者自身によつて証明された。フランス、イタリアの2チーム

7人が挑戦、4人が死んだ1961年7月のモン・ブラン、フレネイ岩稜の悲劇(邦題『さらば白き氷壁』として映画化された)でもイタリア・チームのリーダーだったボナッティは生き残った1人だったため、何かと批判にさらされた。山の世界で得た栄光と不遇。ボナッティは、自分を再生するために新しい世界に身を転じたのだろう。ただ、その行動は、日本にはなかなか伝わらず、偉大なる登山手の伝説だけが残った。

激しい登山に明け暮れた青年時代を経て、地球のあらゆる辺境を歩いてきたボナッティの生き方が私には興味深かった。そのことを彼も理解したのだろう、冒頭「人間ボナッティを知りたい」と切り出すと「それは私にも嬉しい。仕事も芸術も山も、何もかも、すべての上にあるのは、人間だからだ」と応じた。

人間として一貫すること、そういう言い方はしなかつたが、それがボナッティの美学だ、とインタビューをしてわかつた。ラインホルト・メスナーが8000^キ峰14座を完登した際、ボナッティは「素晴らしい記録だが、

もしメスナーの周辺にあの大企業やスポンサーがいなかつたら、もっと素晴らしい」と痛烈なコメントをした。そのことをメスナーは気にして「D'erbabu(邦訳「生きた、還った」)の最後に、ボナッティの批判について自分の思いを書いている。

40年前、「I Giorni Grandi(邦題「大なる山の日々」)の最初のページに「偉大にして古典的な山登りの若き最後の希望であるラインホルト・メスナーに」と最大級の献辞を書き、「自分の後継者」とみなしていたメスナー。が、「言うことと行動が一致していない。私と対極にある人間だ」と依然厳しかった。

帰国にあたり「ボナッティは刊行したばかりの著書「In Terra Lontana(遠い世界)」に署名してくれた。表紙には、杖を手にすつくと立ち広大な砂漠を見渡している本人の写真。彼の35歳以後の人生を象徴している。

ワルテル・ボナッティ。低い、セクシーな声で、言葉を選んで語る男だった。伝説のクライマーの本音を聞けたのは、なんと貴重だったことか。

オ・ヒ・オ・ン

定款変更についての自然保護委員会の見解

自然保護委員会 富澤克禮

本年6月の定款変更の自然保護にかかわる条文変更について、会報『山』7・8・9月号の3回にわたり会員の意見がとりあげられている。そこで、今回の定款変更に至る経緯を説明し、新定款についての自然保護委員会としての見解を示す。

I 定款変更の経緯

【理事会提案】

4月13日の理事会において、定款の変更案が提案された。本提案中で、自然保護にかかわる部分として、現行の「第4条4、自然保護活動の推進」が、変更案では「事業」第4条(5) 山岳環境の保全及び整備」という表現におきかわっていた。

この変更気づいた出席の山川理事(当時)が「誰が原案を作成したのか、どういう検討をしたのか」と質したところ、説明者として同席の定款委員長から「定款委員会で検討した結果である。整

出
自然保護委員会での検討結果を、担当理事である藤本副会長(当時) 経由、説明文をつけて定款委員会に提出した。

【変更案の決定】

定款委員会での検討の結果、自然保護委員会案の「(5) 山岳環境の保護・保全活動」という表現を、体裁上ほかの条文と統一するため「活動」の文言を削除、最終案として「(5) 山岳環境の保護及び保全」となった。これが5月11日の理事会に付議され、総会議案として決定。6月18日の通常総会にて、可決承認された。

II 自然保護委員会の見解

1・素案の「山岳環境の保全及び整備」という表現は、従来の考え方を否定し、人為的ニュアンスの強い「保全及び整備」という言葉に置き換えるもので、納得しがた

い。
2・時代の変遷とともに日本山岳会の自然保護活動の内容が多様化してきているという現実がある。環境保全という文言は、登山道や山岳トイレの問題への取組み、森づくりなど、活動の実態を追認し

たものである。
3・日本山岳会という山岳団体の活動であることを考えれば、われわれの活動は、第一義的には当然山岳環境にかかわるもので、山岳環境の〴〵という文言が入っても特に問題はない。

4・定款変更で、「自然保護活動の推進」という文言が消え、「山岳環境の保護及び保全」という表現に変わったが、「(目的)第3条」に、「本会は、山岳に関する……登山を通じてあまねく体育、文化及び自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする」とある。これと併せて読めば、新条文が従来の「自然保護」という文言を否定したのではないことは明白で、これによりわれわれの活動スタンスが変わるものではまったくない。以上、委員会としては、これまでど何ら変わった方向性を持つものではなく、これまでどおりの運営を行なっていくことになる。
なお、本改定に伴って「自然保護委員会」の名称を環境保全委員会に変更するのか」という意見もあるが、自然保護委員会としてはまったく考えていない事を付言しておく。

トピックス

神大キャンパスに巨大ウォールがオーブン 落合正治

おそらく国内の大学に設置されるものとしては最大級となる競技用クライミング・ウォール(高さ12m、幅5m、奥行3・75m、グレイド5・10〜5・13)が、神奈川大学横浜キャンパス総合グラウンド(横浜市神奈川区)に完成し、9月24日に日本山岳協会、日本山岳会、神奈川県山岳連盟の代表者、山岳部OBなど山岳関係者を招いてお披露目会が盛大に行なわれた。

同大山岳部は2000年4月に部員ゼロに陥り休廃部を迫られたが、今は12名が在籍(男11、女1名)するクラブに成長した。この復活の秘訣は、OBと現役がスクラムを組んで展開したドリーム21計画であろう。「夢抱き 夢育み 夢実現」を合言葉に大学創立80周年祝賀事業として単独大学による、セブンサミッツ登頂に向けて果敢に挑戦を始めた。03年1月、南米大陸最高峰アコンカグア登頂を皮切りに、エブルース、コジウスコ、キリマ

ンジャロを順調に登り、06年6月には多くの試練を乗り越えて北米大陸マッキンリー登頂、09年5月に世界最高峰チョモランマ(エベレスト)登頂、同年12月に南極大陸ビンソン・マシフに4名全員登頂し、2人のセブンサミッターが誕生、国内初の単独大学によるセブンサミッツ制覇を達成した。「質実剛健 積極進取 中正堅実」を建学精神に掲げる同大にとつては、正しくこれを地で行く真骨頂。今回のクライミング・ウォールはこの快挙を記念した報償として造られたものだ。

式典では、中島三千男学長、神崎忠男日本山岳協会会長、菊池稔同大山岳会会長のあいさつに続き関係者によるテープカットが行なわれ、森茂県岳連競技委員長のもと地元国体優勝クライマー山内誠君、白井唯監督によるデモンストラクションが行なわれた。

この後同大LUXホールで祝賀パーティが行なわれ、午後からは日本フリークライミング協会篠



クライミング・ウォールを背にあいさつする神崎日山協会長

崎善信理事長、山本和幸理事、都岳連藤江理恵さん、藤枝道勝さんらの指導により、現役学生、OBらを対象に安全の基本、ロープワークをはじめとするクライミング講習会が開催され、トッププロブレード、ボルダリングなどを楽しんだ。

神大山岳部は建学と創部100年を照準に、新たな挑戦目標「山岳部100年ビジョン」を掲げ、「G(グレートサミッツ10峰)&G(ジャイアント14座)」計画で地球の屋根24座登頂を目指し、同時進行でクライミングコンペ、トレイルランなどへの参戦を目論んでいる。

これはアルパイン・クライミングという従来型登山をもっと大きな視点に立って、競技スポーツ化したフリークライミング、トレイルランとコラボレーションして新しい登山文化を発信しようというものだ。

100年という大きな節目の「白いキャンパス」に向かって、まだ見ぬ未来の後輩たちと壮大な「夢」を共有しつつ夢を描こうという壮大な計画である。

N
 東 西 北
 南 南 南
 S

初期会員・佐藤武雄氏の
 書簡を調べて

佐々木民秀

本会発行の『日本山岳会百年史』(本編)の口絵に紹介されている「ウェストン氏日本アルプス登山講演会」の入場券が偶然にも発見され、後世に残す結果となった佐藤武雄氏(宮城県若柳町・会員番号213)関連のエンター(書簡)を、その後も再度にわたり調べてみた。

その結果、山岳に関するものはあまり期待できなかったが、大正13年度の本会会費納入済みの証(震災ハガキ使用)が見つかったので紹介しておきたい。(写真)

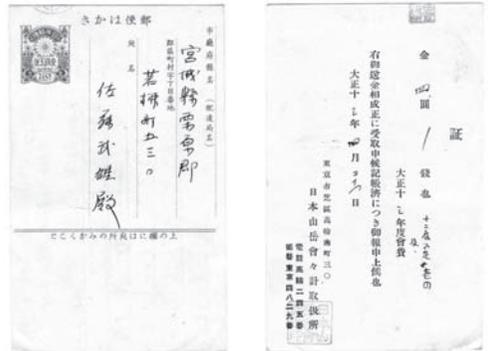
宛先は若柳町となっているが、大正11年ころにはすでに事業(鉛筆業界)を成功させていたらしく、このころは東京京橋に住所を移し

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

ている。宛先からして、その直後に起きた関東大震災によって、一時期、若柳町に戻っていたのかもされない。

また、もともと成沢姓であったが、慶応義塾大学卒業後、早々と若柳町の佐藤清助商店に婿養子として迎えられる。前回、『山』757号で報告した時は、清助を襲名したと記したが、襲名していなかったことも一連の書簡で判明した。

佐藤氏は、明治45年に行なわれた「ウェストン講演」の2年後の大正3年6月から1年近くにわたる外遊(米国)しており、多くの書簡(外信便)を残している。しかし、山岳関係はほとんど見当たらず、山岳雑誌の差し留めいや友人の武山良次(会員番号114)の安否を知るくらいで、そのほとんどは旅行中の見聞記であった。また、大正7年に横浜正金銀行



大正13年度的全費納入済みの証

ロサンゼルス支店長・小島久太(鳥水)氏からの年賀状も見つかったことから、その後も小島氏と親交があったことが窺われる。退会は昭和17年。

なお、佐藤商店のエンターは、かなりの量があったものと思われるが、そのうちの一部を偶然にも筆者と友人(伊藤健一氏)が入手したものである。入手できなかったものの中には、初期の日本山岳会に関する資料などがまだあったかも知れない。

ナンガ・パルバットの切手
 鈴木正規

ナンガ・パルバットは、高さでは世界第9位である。ヒマラヤの登山史上、最も劇的な波乱を生んだ山で、7回の挑戦の後、ついに登頂されたが、その間にじつに31人の命を失った。

その登頂は1953年、隊長ヘルリヒコフアー博士のもとで、ドイツ・オーストリア隊、8人からなっていた。

一行がベースキャンプに集結したのは、5月24日。何よりの痛手は、パキスタンが独立してシエルパの入国が許可されなかったことだった。そのため隊員は高所に荷を揚げることに苦勞し、第1、第2とキャンプを進めるのに随分と時間を要した。第3キャンプを省略して、7月2日に山稜に取り付き、「モーレンコップ」の西側の鞍部に、第5キャンプが建設された。

第5キャンプには4人の隊員がいた。そのなかの一人ヘルマン・ブルは、7月3日午前2時半、キャンプを出発。30分ほど遅れて

ケムプターが後を追った。ブルは7時ごろジルバー・ザッテルに着いたが、ケムプターは追いつくことができず、ザッテルで登攀を断念した。そのため、ブルはほとんど食料を持たずに前進する羽目になった。彼は一人で雪のプラトーを経て、頂上目指して進んでいった。前峰を越えて、パツイン・コルと呼ばれる鞍部へたどり着いたのは14時だった。

そこから主峰の肩へ向かって困難な岩場を登りきり、ついに19時、頂上に達した。彼はそこで、雪の中にピッケルをさし、それにチロル山岳会の旗とパキスタンの国旗を結びつけ、数枚の写真を撮った。それが彼の頂上に立った



頂上でのピッケル



ヘルマン・ブル

ことを立派に証すものとなった。下山の途中で日が暮れて、彼は急峻な岩場に身を寄せ、右手で岩をつかみ、左手にスキーストックをかかえて、一夜を過ごした。寝袋もビバーク・ザックも、身を確保するザイルもなかった。第5キャンプを出発してから40時間、標高差1200メートル、ナンガ・パルバット単独初登頂という空前絶後の登攀を成し遂げ、超人的な登攀記録をうちたてた奇跡的な登頂だった。

深田久弥没後40年 芦安山岳館で企画展

深沢健三

日本山岳会の元副会長で、『日本百名山』の著者、深田久弥が亡くなって今年で40年。亡くなった茅ヶ岳に近い南アルプス市芦安山岳館(塩沢久仙館長)で企画展「深田久弥没後四十年 南アルプスの日本百名山」が開かれている。

同山岳館は、南アルプスの自然、歴史、魅力などを発信しており、企画展は『日本百名山』に収められた南アルプスの十座を、地元の



6月18日のオープニングで話をする大森久雄さん

視点も加えて紹介している。なお十座とは、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、鳳凰山、北岳、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳、光岳。それぞれの百名山の文章、山と地元のエピソード、自然の解説などの文字パネルと、地元や南アルプスに関係する人たちが撮影した写真パネルを展示。石川県の深田久弥山の文化館や長男の深田森太郎さん、百名山の編集者だった大森久雄さんが協力した遺品や作品のケース展示などで構成。ほかに山梨県内の日本百名山紹介や毎年4月に茅ヶ岳の麓にある深田公園で開かれている深田祭の30年の歩みなども紹介されている。

6月18日のオープニングには深田さん、大森さんも出席し、思い出などを話した。なお企画展は、来年5月31日まで開催している。



活動報告

山岳会の
同好会の
各委員会、活動報告です

山の自然学研究会

ロマンあふれる地形学と高山植物の宝庫・バイカル湖の旅

7月7日14時、シベリア鉄道グループ4人は成田に集合。ウラジオストクに向かった。

8日、曇り、晴れ。ウラジオストク市内を見学。戦前の日本人の活躍・活動・生活の場を中心に見学。夜、シベリア鉄道によるイルクーツクへの長旅がスタートした。9日晴れ。途中駅のハバロフスクでは、ガイド役の坂田氏の知人の若きロシア人の女性の出迎えを受ける。車内では、周りのロシア人の乗客とも親しくなり、これからの鉄道の旅が楽しめそうだ。

10日晴れ、周囲の景色は、シラカバ、カラマツの疎林とヤナギラン、オニシモツケ等の草原が続く。どこまで行っても景色は変わらない。

11日晴れ、午後、バイカル湖が見えてきた。夕方、目的地のイルクーツク駅に到着。ここで、すでにホテルに着いていたウラジオストクからの飛行機利用グループ2人と合流し、はじめて全員が顔をそろえた。

12日晴れ、イルクーツクから湖畔の村リストビヤンカに向かう。昼食は、バイカル湖特産の魚オームリを賞味。湖沼博物館、植物園、青空市場等を見学後、ホテルに。ここまで同行の坂田氏と別れる。

13日晴れ、植物観察の1日目。船で約1時間、バド・チョルナヤへ。フィールドガイドは持参の植物の図鑑で、ラテン語の学名を示してくれたので正式な名前を知ることができた。昼食は、ガイドが作ったキャンプの飯盒炊爨すいさんの雰囲気を楽しんだ。植物観察をしながら、宿泊地のポリシヨイ、

コテイまで散策。湖面に時どき姿をみせるバイカルアザラシには、皆感激した。

14日晴れ、植物観察の2日目。船で約1時間。カディリナヤへ。湖岸に続く湿地で、一科一属一種の珍しい植物スギナモを見ることができた。また、エーデルワイスやシベリアヒナゲシも見られる。今日の昼食も、ガイド手製の料理である。夕刻、船で約2時間、リストビヤンカに戻った。

15日晴れ、イルクーツクに戻る途中、木造建築博物館を見学。午後は、イルクーツクの郷土史博物館、教会などの市内見学。

16日晴れ、ブリアート族の博物



バイカル湖畔の広大なお花畑で

館やシャーマンの儀式を見学。深夜にホテルをチェックアウト。空路ハバロフスクに向け出発する。

17日晴れ、早朝、ハバロフスク空港着。ホテルへ移動。午後、ハバロフスク市内見学。雄大なアムール川の流れは印象的であった。

18日晴れ、ハバロフスク空港から帰国の途に、予定通り成田着。参加者全員笑顔で無事帰国した。世界自然遺産のバイカル湖は、人の手が加わっていない自然のままの素晴らしい姿を見せてくれた。いつまでもこの美しい姿を後世に残してほしい。(富澤克禮)

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

秋田支部

長白山「天池」を訪ねて

昨年、佐々木支部長が長白山視察登山に参加したことから、支部山行として「長白山縦走」を企画した。

9月10日、秋田空港を出発し、韓国・仁川空港に着く。参加者は秋田から8名、首都圏から2名の計10名。

11日、延吉空港でガイドの朴春虹さん（中国国籍の朝鮮族）らの出迎えを受け、専用バスで登山口のある西坡山門へ向かう。ここは中国・吉林省延辺朝鮮民族自治州、長白山には朝鮮族、満州族の発祥伝説があり、朝鮮族の聖地であることなどの説明を聞く。中国に住む少数民族の悲しさをガイドは、この地を耕し繁栄させてきたのは朝鮮民族である、中国政府の漢族同化政

策で、中国語を話せない就職もできない、ハンゲルの読み書きができない若い世代が増え、民族の伝統が消えてゆく、それが悲しいと……。

12日、雲が厚い朝を迎える。西坡山門ゲートからシャトルバスに乗り、登山口に到着した時は辺り一面ガスで覆われ、少し先も見えない。雨がぱらついてきた。雨具を着け、石の階段と平行に並ぶ木階段を1300段ほど昇りきると、そこは中国と北朝鮮の国境であった。ここから「天池」が見えるはずであるが、ガスのため何も見えない。現地の李徳春リーダーから、ここから下山した方がよいと説明があつたが、3グループのリーダーが話し合い、青石峰まで登るグループと、下山して溪谷散策のグループとに別れることになり、秋田支部は5名が登山、5名が

下山、私は下山することにした。シャトルバスが長白山溪谷に到着するころ、雲の切れ目から僅かながら陽も射し始めた。原生林の中、溪谷に沿って整備された木道を散策した。大峽谷の、侵食されてできた奇岩群は、羅漢像が並んでいるようにみえた。登山ゲートで下山したグループと合流し、北坡山門に向かう。長白山瀑布、小天池等を散策して長白山温泉へ。

13日、晴れ。四輪駆動車に乗り、北坡天文峰展望台へ。

天文峰から碧い神秘の湖「天池」を見下ろす。この「天池」を見るために来たのだからよかつ



碧い神秘の湖「天池」にて

た、嬉しかった。対岸は北朝鮮、將軍峰から長い歩道が湖畔まで築かれているのが見えていた。

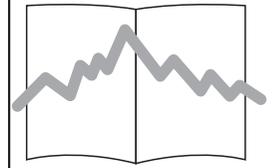
龍井の町には旧日本総領事館（現在は市役所）の建物があり、その地下室は投獄所であつたと聞く。近くには関東軍の宿舎がまだ残されており、市営住宅のようになっているとのことだ。

国境の町、トモシロ豆満江を隔てて対岸は北朝鮮、ここで筏に乗り豆満江を遊覧。国境を売り物にしていると思つたが、朝鮮民族は涙を堪えて対岸を見ると聞き、複雑な気持ちであつた。

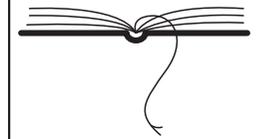
14日、延吉市で朝鮮民族市場を見学してから空路、仁川空港に戻り、訪韓のたびにお世話になっている「韓国山岳会同友会」の李載洪さんらを囲んで夕食。15日、秋田空港着。

今回の長白山登山は、山に登り「天池」を眺めることだけではなく、李徳春リーダーやガイドの言葉の端々に感ずる朝鮮民族としての誇りと悲しみ、分断されている故国のこと、満州のことなど、今まで気づきもしなかつたことに思いを馳せた山旅でもあつた。

（鈴木裕子）



図書紹介



角幡唯介・著

『雪男は向こうからやって来た』



2011年8月 348頁
集英社刊 英六判 定価1680円

『空白の五マイル』で「開高健ノンフィクション賞」「大宅壮一ノンフィクション賞」、それに「第一回梅棹忠夫・山と探検文学賞」の三つの賞を総なめにした気鋭の書き手の受賞第一作。なのだが、実はこの本、前年の「開高健ノンフィクション賞」の最終選考に残ったものを書き直して受賞第一作として刊行されたものだ。

大学探検部時代から続けているツアンポー峡谷探検をやりとげたい、との思いに駆られた著者は「冒険ルポルタージュを生業にできないか」と、2008年春、朝

日新聞記者をやめると決意。直後、先輩記者に高橋好輝率いる雪男探検隊への参加を勧められた。「雪男のようないわゆる未確認生物に対して興味を持ったことはまったくなかった」著者が戸惑いながら、ヒマラヤ山中で八木原罔明、大西保、村上和也ら6人の猛者たちと頑張る様子がおもしろい。搜索3

度目の高橋隊長の目的は、足跡の発見ではなく、あくまで「姿を撮影する」こと。ダウラギリIV峰のコーナボン谷を中心に4つのキャンプをローテーションを組んで移動しつつ「なるべくテントから外に出ず、望遠レンズをのぞきながら黙って監視」を続ける。顛末は本書にまかせよう。

そのなかで著者は、かつて雪男を探そうと搜索隊を組織し、ヒマラヤの山中で苦闘した人々のことに思いを馳せる。メンルン氷河で「世界で最も有名な雪男の足跡」

を撮影したエリック・シプトン(1951年11月)、例のコーナボン谷で雪男らしい動物を見た(1971年5月)芳野満彦、シシャパンマのエボガンジエロ氷河で足跡を見つけた(1980年10月)田部井淳子ほか、次から次に馴染み深い登山家たちが登場する。これほど多くの登山家が雪男に遭遇、あるいはその足跡を発見し、繰り返し搜索隊が出されていることに読者は驚くだろう。

そして、ルバング島で小野田寛郎を「発見」、その後雪男探しに情熱を傾け、コーナボン谷で雪崩に埋まって帰らなかつた(1986年秋)あの鈴木紀夫。丹念な取材と、巧みな構成力で角幡は読ませてゆく。雪男は向こうからやって来た、の表題の意味が、これらの「先覚者」たちの姿、言葉を追う旅から浮かび上がってくる。「わたしは雪男の存在を、実際の搜索現場ではなく、接した人の姿の中に見たのだ」と。

ただ、近年話題となった、ライオンホルト・メスナーの雪男捜しについて、なぜかふれられていないのが気になった。

(江本嘉伸)

『東西の接点 鹿島槍に挑んだ人たち』

山学同志会・著



2010年8月 305頁
岩峰社刊 A5版 定価2500円

本書の企画者・斎藤一男氏(山学同志会の創立者)は数年前に大町山岳博物館長・柳沢昭夫氏と共同で、鹿島槍を中心にした後立山の登山史のまとめの作業に入っていた。柳沢館長の急逝で計画が挫折したあと、山学同志会の出版物として本書を出すこととなる。

昭和初期から30年代にわたる鹿島槍を中心にした登山史をたどり、斎藤氏らは鹿島槍を我が国の「登山全盛時代」の主舞台であったとの認識に至った。いわく「なぜなら鹿島槍ほど東西の精鋭が何度も試登を繰り返しては失敗し、風雪の中で悲惨なビバークを重ね、吹雪と雪崩、雪庇キノコ雪に果敢に挑戦したドラマチックな数々の記録は、とても穂高や剣の比ではないからである」と。そして書名に「東西の接点」を選んだ理由は、鹿島槍北壁、荒沢奥壁を中心に繰

り広げられた関東、関西両陣営の激しい先陣争いの記録を丹念に拾ったからに他ならない。

西からは、京大、関学、神戸商大、阪大、甲南、浪高、東からは東大、立大、早大、東京商大などが、さらに社会人山岳会の登嶺会、独標登高会、山学同志会などが加わり、足しげくこの山に通った。

本著では鹿島槍の北壁、東尾根、荒沢奥壁などが中心だが、五竜岳東面、不帰岳東面などの登攀史もたどられ、時代的には、近代登山の黎明期、スキー登山の発祥、積雪期の初登頂と初縦走争いの時代についても解説されている。

後半には昭和30～40年代の山学同志会のこの地域での山行記録が、当時の会報から収録されている。若き日の小西政継氏の言動なども含めて、当時の山行の様子が活写されており楽しく読める。

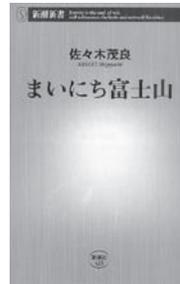
なお、先行文献である吉田二郎著『鹿島槍研究』（朋文堂、昭和32年）については、吉田氏の登攀記に疑義があり、当時の岳界に大きな衝撃を与えたことを思い出す方も多いのではないか。斎藤氏はかつて自著『岩と人』（東京新聞出版局、昭和55年）で本件の成り

行きを詳細に論考されたこともあったか、本書では簡単な記載にとどめられている。

（越田和男）

佐々木茂良・著

『まいにち富士山』



2011年6月 新潮社刊 新書判 188頁 新書判 714円

實川欣伸・著

『富士山に千回登りました』



2011年7月 日本経済新聞出版社刊 新書判 233頁 新書判 893円

佐々木茂良さんの『まいにち富士山』は6月20日刊行。實川欣伸さんの『富士山に千回登りました』は、7月9日、實川さんや私も参加したJAC静岡支部のモンゴル、アルタイ・ウルギー山登山隊の帰国前日に刊行されました。

両氏は、富士山へ800回以上登頂したという点では共通していますが、他はほとんど好対照とい

う感じですが。山登りのタイプで佐々木さんは信仰登山。登る山は金時山と富士山、あとは丹沢山塊。登って神社や祠があると二拍手一礼三拝というお参りになります。そういうエピソードが、富士山頂浅間神社奥宮前に寝そべっていた若者とのやりとりで出てきます。

今年の8月12日、私が富士宮口の胸突八丁を下つてくるときに、登ってくる佐々木さんに会いまして。この日で873登ということでした。

さまざまな山や登り方が書いてあるわけではなく、章立ては「五合目」「六合目」「七合目」「八合目」「九合目」「山頂」「剣ヶ峰」として、初心者、富士山へ初めて登る人のためのガイドブックのようになっていきます。元、中学校や障害児学校の管理職まで勤めた人らしく、言葉も優しい。

一方の實川さんは、「いやなこととは絶対やらない、好きなこととはとことんやる」という人で、好きなこと、山登り、歩くこと――が長く続いていることの原因のようです。

富士山の1000回登頂、4つの登山道の連続登山を不眠不休

でやる「二筆登山」を2度も達成したり、「東京から富士山頂まで」をこれまた不眠不休で歩くことを2度やったり、富士山の6連続登頂をやつたりと、常に肉体と精神の限界に挑戦しています。ラニンング登山の人もいますが、彼は走らない、ただひたすら歩くスポーツ。

また、チョモランマ以外の7サミッツ登頂済みで、2013年チョモランマを目指すという点でもスポーツ・アルピニズムです。この本は、そういう實川さんの数々の記録がつけられる、記録をなせる實川さんという人物を描いた本です。

私の富士山の登頂記録に彼が初めて登場するのが2006年10月7日、私の250登の時（本当は、251登でしたが、この時實川さんが295登、佐々木さんが224登でした）。それから1年ほどして、静岡支部に入会してもらいました。以来、静岡支部の新年会、総会、60周年記念展示などにも協力してくれています。なかなか幅広く山に関わっています。

（有元利通）

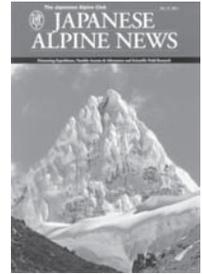
英文ジャーナル 2011年第 12 号発行

中村 保

例年より遅れましたが、8月下旬に Japanese Alpine News Vol. 12 2011 (B5判、132頁) を発行し、海外に送付しました。ブータンの氷河湖調査をはじめとする貴重な登山・踏査・研究記録が掲載されています。

内容は3部構成で、第1部「特集」、第2部「登攀と遠征」、第3部「踏査と調査」。

第1部では「ブータンの氷河湖研究」(小森次郎)、「中国・カワカブ西面シェチュ氷河」(W・シュルツェ、A・ヘスベルク)、「ミャンマーの秘峰カカボ・ラジ」(金沢聖太)。第2部では「ユーコン・ローガン南東壁」(岡田康)、「四川省ダッドメイン東壁」(中村保)、「インド・パンゴン山脈マリ峰」(沖允人)、「四川省セエルデンプー」(ディラン・ジョンソン)、「同・夏羌拉」(吉村千春)、「同・牛心山南東壁」(亀田博生)などの初登記録。第3部では「中国西部に青いケシを求めて」(吉田外司夫)、「雲南キリスト教会探訪」(中村保)、「四川・理塘高原のアルパイン・パラダイス」(中村保)、「チベット南東部カンリ・ガルポ山群の6,000m峰47座」(井上達郎)を収録しています。



2011年8月
B5判 132頁

JAPANESE ALPINE NEWS TABLE OF CONTENTS Vol. 12 2011

FEATURE ARTICLES

A Glacial Lake Study in the Bhutan Himalaya	Jiro Komori	1
Exploring Kawagebo W face & Shequ Glacier	W. Schulze, A. Hessberg	15
Khakabo Razi, Veiled Mountain of North Myanmar	Shota Kanazawa	24

CLIMBS & EXPEDITIONS

I-to; The Southeast Face of Mount Logan, YUkon	Yasushi Okada	26
Daddomain 6,380m-New Route on East Face, Sichuan	Tamotsu Nakamura	30
The first ascent of Mr. Mari, Pangong Range in Ladakh	Masato Oki	36
First Ascent of Se' erdenpu 5,592m, Qonglai Mountains	Dylan Johnson	42
First Ascent of Xiaqiangla 5,470m, Daxue Shan	Chiharu Yoshimura	46
First Ascent of Southeast Face of Niuxin Shan 4,924m	Hiroo Kameda	51
New Zealand Ascent of Dogonomba, Sichuan	Yvonne Pfluger	54
Reddomain 6,112m First Ski Descent 2009	Ingrid Bakstrom	60
Cordilleras Huaytapallana & Central, Peru 2007	Ingo Roeger	62

JOURNEYS & RESEARCH

Quest for Meconopsis in the borderlands of West China	Toshio Yoshida	69
Visiting Christian Churches in Salween Basin 2010	Tamotsu Nakamura	75
Alpine Paradise - West Sichuan Highlands 2010	Tamotsu Nakamura	86
47 Six-thousanders in the Kangri Garpo Mountains	Tatsuo (Tim) Inoue	104

(Cover photo: Kona I 6,378m west face, Nyainqentanglha East. Tamotsu Nakamura)



平成23年度第6回(9月度)理事会
 理事

日時 平成23年9月14日 19時
 より20時30分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】 尾上会長、西村副会長、
 高原・森・小林各常務

理事、野沢・中山・永
 田・萩原・志賀・古野・
 川瀬各理事、平井・浜
 崎各監事、宮崎・橋本
 各常任評議員

【委任】 吉永副会長、節田理事

【審議事項】

1. 秩父宮記念山岳賞審査委員の
 委嘱の件(西村)

次表の委員の提案があつた。委
 嘱期間は23・24年度。
 (承認)

役割	会員番号	氏名	備考
委員長	9776	竹内哲夫	
委員	4440	平山善吉	
〃	5751	宮崎紘一	新

〃	5863	河野長	
〃	7641	池田常道	新
〃	10214	山口峯生	
〃	13057	萩原浩司	新
事務局	7468	西村政晃	

現在2件の応募があり、10月21
 日に審査委員会を開催する。なお、
 来年度以降会員外からの応募がで
 きるよう規程を変更する予定であ
 る旨の説明があつた。

2. 支部活性化PTメンバー委嘱
 の件(宮崎)

次表のメンバーの提案があつ
 た。
 (承認)

役割	会員番号	氏名	備考
担当理事	7949	高原三平	新
リーダー	5751	宮崎紘一	新
メンバー	6002	神崎忠男	
〃	6372	石田要久	
〃	7249	大久保春美	
〃	8091	石橋正美	
〃	11808	高橋重之	新
〃	12125	今田明子	

〃	12391	山本憲一	
〃	13888	豊倉さと子	新
〃	14951	谷内剛	新

3. 編集(山岳、山、ジャパニ
 ズ・アルパイン・ニュース)業務
 委託の件(高原・小林)

先月の理事会において協議し
 た『山岳』等の編集業務委託は、
 今後別添に示す稟議書、委嘱状で
 行なう。
 (承認)

4. 入会希望者の件

14名の入会希望者があつた。
 (承認)

【報告事項】

1. 各PTの現況報告

各プロジェクトチームから現
 況と今後の対応、課題等について
 報告があつた。

① 新法人移行PT(高原)

10月末申請に向け申請書類作
 成中。9月10日開催の臨時全国支
 部事務局担当者会議で新法人にお
 ける会計処理方法等を説明し理解
 の徹底を図つた。

② 復興支援事業PT(宮崎)

救援募金の使途は、骨格につい
 て成案を得たが、対象支部に住所
 はあるが支部に所属していない会

員の被災状況調査・把握中である。
 9月中には送金を完了できるよう
 努めている。なお、被災状況調査
 は期限つきで対応する。

③ 支部活性化PT(高原・宮崎)
 新メンバーを迎え9月18日に
 会議を開催する。

④ 山の日制定PT(西村)

新メンバーを迎え活動を開始
 した。パンフレット第4号(労山
 担当)発行を目指す。

⑤ ルーム検討PT(森)

9月2日に初打ち合わせを開
 催した。具体的検討は今後鋭意行
 なう。

2. 予算管理状況(西村・小林)

4月〜7月の概況について資
 料により説明があつた。入会金お
 よび年会費の入金が例年に比して
 おおむね好調である。理事各位が
 収支状況を共有して予算執行に努
 めることが肝要である。

3. 海外登山基金審査保留分1
 隊の扱い(萩原)

23年度海外登山基金前期募集
 分で書類不備で保留となつていた
 「JACシンゲーチュリ登山隊
 2011」を助成対象外とした。

4. 全国支部事務局担当者会議 (高原)

新法人移行に伴う支部会計処理の取り扱い、その他について臨時支部事務局担当者会議を9月10日に開催した。山岳研究所運営委員会および高尾の森づくりの会からも会計担当者が参加した。

5. 日中韓学生交流登山(古野)

第5回を迎えた日中韓3国学生交流登山は、韓国の大屯で8月12日～18日開催され、無事に終了した。次回は中国が担当で開催するが、実施時期、参加者(人員増やその他諸々等)について再考するの必要を感じた。

6. 中華民国山岳協会の新理事長訪問(高原)

8月23日に中華民国山岳協会の新理事長 何中達氏ほか5名が来日し、当会と日山協が合同で新任歓迎会を催した。

7. H A T J 創立20周年式典・祝賀会(西村)

H A T J 創立20周年式典・祝賀会が9月3日開催され、会長代理として西村副会長が出席した。

8. 第14回こども登山教室の実施 (高原)

宮崎支部恒例のこども登山教室が1泊2日で開催(7月31日～8月1日)され、小学1年生から中学2年生までの29名が参加した(支部からは23名参加)。

9. 「テンジン・ヌルブ絵画展」 後援依頼(高原)

N P O 法人 EARTH WORKS SOCIETY(理事長 大谷映芳氏)から名義後援依頼があり、了承した。

10. 1970年エベレスト登頂 放送許可願(高原)

(株)テレビ東京制作 P R O T X から「日本山岳会登山隊エベレスト登頂」(1970年6月11日NHK放送)の放送許可願があり許可した(資料映像委員会で検討了解済)。

11. 全国支部懇談会(高原)

宮城支部担当で10月15日～16日、栗駒山で開催。理事会から5名参加予定。

12. 評議員会の開催日程(高原)

10月25日13時から開催する。

13. 神奈川大学クライミングスクールお披露目会(西村)

9月24日に開催予定で、会長代理として西村副会長が出席する。

14. 新人会員オリエンテーションの開催(高原)

10月1日にルームで開催する(総務委員会担当)。今年度の対象者は180名。

15. 23年度安全登山普及指導者中央研修会の案内(高原)

独立行政法人日本スポーツ振興センター主催の安全登山普及指導者中央研修会が、11月11日～13日、国立登山研修所で実施する旨の案内があった。

16. 事務局職員退職について(高原)

9月30日付で荒井久仁子職員が退職予定。事務局体制について検討している。

17. 会報「山」9月号編集報告(神長)

「山の日」制定協議会も参加して岳都松本・山岳フォーラム

J A C など山岳5団体でつくる「山の日」制定協議会では、11月20日(日)午後、松本市で開催される「岳都松本・山岳フォーラム」の実行委員会に加わり、イベントを盛り上げることになった。

テーマは、上高地、穂高などの山岳景観 P R を一歩進めて、広く、山や自然の持つ魅力や多様な価値を内外に発信し、山岳環境の保護や山岳文化の継承、安全登山の啓発、などとなり、合わせて、「山の日制定に向けた取り組みを松本からも発信します」。「山の日」制定運動との提携は、6月のウェストン祭で決まった。実行委には信濃支部も参加している。

第1部は、山ガールに代表される若い世代に向けて「女性ファッションに見る登山史百年」。第2部は田部井淳子さんの基調講演に続いて、パネルディスカッション「山の魅力」。

会場は松本駅前のホテルブエナビスタのホール(700人)で12時開場。入場料は無料。

ルーム目誌
9月

- 1日 スキークラブ
- 5日 総務委員会
- 6日 図書委員会 スケッチクラブ
- 7日 集委員会 青年部 みちのり山の会
- 8日 常務理事会 フォトクラブ 山岳地理クラブ
- 9日 九五会
- 10日 支務事務局担当者会議
- 12日 資料映像委員会 スキークラブ スケッチクラブ
- 13日 山岳研究所運営委員会 海外委員会
- 14日 理事会 山想倶楽部 休山会
- 15日 科学委員会 山の自然学研究会
- 20日 総務委員会 会報編集委員会 00会 スキークラブ
- 22日 図書管理委員会 支部活性化PT 山遊会
- 26日 高尾の森づくりの会
- 27日 インターネット小委員会
- 28日 自然保護委員会 麗山会
- 29日 海外委員会

9月来室者424名

会員異動(9月)
物故

- 中村彰志(3372) 11・9・1
- 二瓶幸夫(11351) 11・9・30
- 人見五郎(11842) 11・9・24

退会

- 岡部庸子(8961)
- 原崎浩人(14430) 宮崎



図書受入報告(2011年9月)

著者	書名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
水野勉	中央アジア文献逍遙 第2巻	421p/26cm	水野勉(私家版)	2005	著者寄贈
水野勉	アムール、ウスリー、そしてスガリー——北方文献逍遙	85p/26cm	水野勉(私家版)	2011	著者寄贈
水野勉	ロンドンの古本屋——山書の風に吹かれて	156p/26cm	水野勉(私家版)	2011	著者寄贈
藍野裕之	梅棹忠夫——未知への限りない情熱	509p/20cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
山中美子・関根茂子	だって楽しい山あるき(新ハイキング選書 No.31)	292p/21cm	新ハイキング社	2011	出版社寄贈
山形県遊佐町教員委員会(編)	史跡島海山保存管理計画書——平成23年3月	201p/30cm	山形県遊佐町教育委員会	2011	鈴木正崇氏寄贈
講談社(編)	マンガ偉人伝 かるたコレクション——冒険王編	175p/21cm	講談社	2011	出版社寄贈
柴崎徹	リズム——登山好きの子犬の生涯	116p/20cm	柴崎徹(私家版)	2011	著者寄贈

職員1名退職にともなう事務局体制について

総務担当理事

職員の荒井久仁子さんの退職(9月30日付)にともない、後任を検討しておりましたが、このたび、以下3名の会員(石光久仁子、今田明子、染谷美佐子)を事務局支援員として、交替勤務、有償で、当面の間採用いたします。今まで通り3人体制は変わりませんので、会員の皆さまには、よろしく願いいたします。

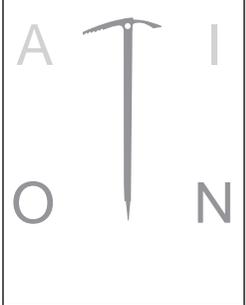
◆山岳遭難防止セミナー

指導委員会主催で左記のように開催される。

日時 10月22日(土)14時30分～18時
内容 長野県警山岳遭難救助隊員による、冬山山岳遭難の実態など



インフォメーション



会場 国際協力機構JICA研究所国際会議場

申込 メールのみ

(☒) jac-seminar2@everest.jp

◆対談 井上靖『氷壁』とその時代 緑爽会

1955年1月、前穂高岳厳冬期登山中に起きたナイロンザイル切断遭難。その遭難を題材にした新聞連載小説『氷壁』はベストセラーになり、映画化もされました。あれから半世紀、当事者の一人である石原国利会員をお招きしてお話をうかがいます。

対談 石原国利会員

日時 11月19日(土)13時30分より

場所 山岳会104号室

問合せ 松本恒廣 (TEL & FAX) 03-

3326-2892

◆テンジン・ヌルブ絵画展

ネパール、ドルポ出身の画家テンジン・ヌルブ氏の仏画展。

期間 10月21日(金)～30日(日)

11時～18時(23日は休み、最終日は16時まで)

場所 ICICクラブ アースプラザ

(地下鉄神保町駅下車A5出口より7分)

問合せ TEL 03-3259-0082

*なおスライドとトークショー

「聖地ドルポはいま」が、23日(日)

年次晩餐会のお知らせ

総務委員会

・12月3日(土) 年次晩餐会を開催いたします。
晩餐会は18時開宴、講演会は14時開演の予定です。
本年の催し物は、20周年を迎えたアルパインフォトビデオクラブによる展示。また展示会会場でインターネット相談室を設ける予定です。
・場所=品川プリンスホテル・アネックスタワー5階(JR品川駅前) 昨年と同様です。

14時～16時に開催

◆松田敏男山の絵画・版画展

北・南アルプス、尾瀬、高山植物などを描いた日本画10点、シルクスクリーン10数点を展示。

期間 11月8日(火)～20日(日)12時～19時(月曜休館)

場所 姉小路ギャラリー(京都市中京区姉小路東洞院曇華院前町)

問合せ TEL 075-254-7902

◆中村みつを個展「山のアルバム」

遠近の山、記憶の風景を、色鉛筆や水彩で描いた作品約20点を展示。

期間 11月1日(火)～6日(日)12時～19時(最終日16時まで)

場所 ギャラリーまあある(JR恵比寿駅東口下車徒歩3分)

問合せ TEL 03-5475-5054

■訂正とお詫び

9月(796)号、17頁4段「対談 井上靖『氷壁』とその時代」の、「1995年」は「1955年」の誤りでした。編集部のみすで、訂正してお詫びし、正しい内容を掲載させていただきます。

大学山岳部の復活奮闘記

④成功

落合正治(神奈川県大学山岳部 監督)

単一大学セブンサミッツ最終目標はビンソン・マシフへの挑戦だ。

チョモランマから帰ってすべの指を失い、病院で毎日割り箸一本でキーボードを叩いて報告書をまとめながら、年末の南極遠征を交渉する。ウエブで国内外エージェントとやりとりし、パトリオットヒルズまでの切符を確保。ペルー在住の先輩を頼ってリマに向かう。

ワイナポトシに登って学生のキャリアアップでビンソン登山許可を取ることと、高所順応とチチカカ湖や歴史遺産マチュピチュ遺跡、クスコを巡るのが目的だった。懐かしいリマの街で体力と鋭気を養い、翌々日、空路ラパスへ。まずは世界一高所のスキー場チヨカルタヤで体を慣らしてBCとなる山小屋へ入り、未明に頂上アタックをかける。学生・鈴木隆志には初めての氷河、クレパス、雪壁に加え、千数百メートルの登高は荷が重すぎたようで、5300mでギブアップ、撤退となった。下山してラパスに戻り、長距離

バスに乗り込んでチチカカ湖からクスコへと向かい、マチュピチュ遺跡やクスコ周辺の遺跡巡りを楽しんでリマに戻る。その日の深夜便で、サンティアゴを経由して南米最南端プンタアレナスに入る。さっそくエージェントに赴き、登山許可を拙いスペイン語と英語で交渉。なんとかOKをとって準備を整え、ブリーフィングの翌日軍用機イリュージョンでウシユワイヤ經由南極大陸へと向かう。海を越え白い大地を約5時間、大氷原に一筋の天然滑走路を滑るようにランディング。中天には、眩しく太陽が輝いている。ブルーアイスの滑走路から1^{km}程で登山基地パトリオットヒルズがある。憧れの白い大地に立つと、なぜか熱いものが頬を流れて止まらない。翌日、力量チェックと高所順応という名目で目の前に聳える山々へ、ガイド2名とクライアント9名で登る。われわれは準備登山の成果か全員が快調に飛ばしてクリア。その数時間後、夕食も慌しくすませ、ツインオッター機でB

Cへと1時間余の空の旅。南極にこれほど山があるとは思わなかった。エルスワース山脈の山嶺を見渡して感動しきり、前方の氷河に飛び込むように着陸する。目の前に数張りのテントが見える。

翌々日にはソリを引いてC1へ、ここから1000mの雪壁を二十数^{km}の荷を背負ってC2へ。天候は安定していて太陽は24時間頭上を回っている。外気温はマイナス20度C前後だが、太陽熱の恩恵でテント内は暖かい。

アタックは片道十数^{km}の氷河をひたすら登りつめて稜線に飛び出すと頂上が見える。慎重に一步一步登っていくと頂上広場にたどり着く。感動の余りか鈴木が大声を出して号泣している。

やっと終わったという安堵感で疲れが吹き飛んでしまう。校旗を掲げて記念撮影し、心ゆくまで眺望を満喫して下山。足取り軽くテントに戻ると、セブンサミッター誕生(田中と宮守)をスタンプと外国隊員が祝ってくれる。

いつものことだが、終つてしまえば達成感より何か物足りなさ、寂しさが脳裏を過ぎる。「次は何を？」と……。

◆編集後記◆

●今月の巻頭は新執行部の人物紹介に当てました。会長とともに山岳部の舵取りをしている理事の顔は、会員の皆さんにはなかなか見えません。開かれた執行部であるためにも、理事はどういう会員が務めているのか、アンケートに答えてもらいました。今後も折にふれ、素顔を紹介していけたらと思います。

●世界的に著名な登山家、ワルテル・ボナッティの訃報が入ってきました。1998年に来日した際、私も青森に同行し、雨の岩木山をいっしょに登ってきました。気さくな人が強く印象に残っています。登山史をつくってきたこうした登山家の訃報に接するのは、ほんとうに寂しいことです。

(神長幹雄)

日本山岳会報 山 797号

2011年(平成23年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上昇
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社